

令和 4 年 5 月 9 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02265

研究課題名(和文)人文主義者とナチズム - その抵抗・傍観・協力の類型をめぐる考察

研究課題名(英文) Humanism and Nazism in 20th Century Germany: Patterns of Resistance, Indifference, and Accommodation

研究代表者

曾田 長人(soda, takehito)

東洋大学・経済学部・教授

研究者番号：50568053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツの人文主義者はナチ体制に対して、抵抗から傍観を経て協力に至るまで様々な態度を取った。本研究は当時のナチズムへの抵抗、傍観、協力を代表する古典文献学者としてK. v. フリッツとK. ツィークラー、W. イェーガー、R. ハルダーをそれぞれ考察の対象とした。そして彼らのナチズムとの関わり、その学問的・思想史的な背景を検討した。さらに、ドイツ第三帝国におけるスパルタ受容を考察した。検討の結果、ナチズムへの傍観や協力に傾いた人文主義者は古代ギリシアの規範の立ち上げ、他方ナチズムへの抵抗に傾いた人文主義者は歴史学的・実証的な方法に強い関心を寄せたことなどが、明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本で従来研究されることのなかった人文主義者とナチズムとの関わり、ドイツ第三帝国におけるスパルタ受容を詳しく検討したに留まらない。その関わりを、新人文主義において統合されていた二つの契機の分解として捉えることで、ドイツの思想史の中に位置付けた。二つの契機とは、一方で古代ギリシアを模範とした人間性に基づく価値の立ち上げ、他方でその歴史学的・実証的な吟味のことである。後者や第一次世界大戦などの結果、人間性という価値はドイツ社会の中で空洞化してゆく。そういった中で、新たな価値の立ち上げという点でナチズムの台頭が近代ドイツの人文主義の展開と不可分であったことを跡付けた。

研究成果の概要(英文)：German humanists related to Nazism in various ways; from resistance via indifference to accommodation. My research examines 4 classical philologists who represent each of these patterns; Kurt von Fritz, Konrat Ziegler, Werner Jaeger, and Richard Harder The analysis shows how they related to Nazism and how their relationship to Nazism was influenced by their scientific research. Furthermore, the reception of Sparta in the Third Reich is clarified. This research comes to the following conclusion: A majority of humanists who tended to indifference or accommodation to Nazism were interested in the preservation of Hellenism as a norm. On the other hand, humanists who resisted Nazism stood under the influence of the historical-positivistic method.

研究分野：思想史

キーワード：人文主義 古典研究 思想史 戦争協力 ナチズム 古典文献学

1. 研究開始当初の背景

(1) ギリシア・ローマ古典古代（特に古代ギリシア）がナチズムの思想・行動の一つの根であったことは、ドイツの「過去の克服」の本格化と並行して、次第に注目を浴びてきた。すなわち 1930 年代から第二次世界大戦終了にかけてのドイツの人文主義者（主に古典文献学者、古代史学者、古典語教師を指す）は、ナチズムに協力、傍観から抵抗に至るまで様々な態度を取ったのである。

(2) 人文主義者とナチズムの関わりについて国内では、政治史的なアプローチから佐々木毅『プラトンの呪縛』があるものの、思想的な研究はほとんどなされていなかった。国外（ドイツ）では第二次世界大戦後、人文主義の伝統を復権する試みが現れる一方、「人文主義の（ナチズムに対する）無力」が公の場で指摘された。その後、東独では 1960 年代 J. イルムシャーの論文「ファシズム政権下のドイツにおける古典語授業」、西独では 1970 年代 V. ローゼマンの著書『ナチズムと古代』が嚆矢となり、研究が行われてきた。この二つの論文・著作は、ドイツの古典文献学者・古代史家によるナチズムへの協力の面に主に光を当て、これを批判的に捉えるものであった。1980 年代以降は、1930 年代から 1970 年代初期にかけてドイツで強い影響力を揮った W. イェーガーを中心とする「第三の人文主義」とナチズムとの関わりも、批判的な考察の対象となった。近年における人文主義者とナチズムとの関わりについての考察の集大成は、B. ネーフの主催下 1998 年にチューリヒ大学で行われた学際的コロキウム「ファシズムとナチズムの時代における古代学とナチズム」[1]である。23 名の発表者が参加したこのコロキウムによって問題の広がりのみならず、人文主義者のナチズムに対する抵抗の諸相も明らかにされ始めた。1996 年から刊行中の『新パウリー古代百科事典』[2]は古典古代の受容と古代学の歴史について 6 巻を割いており、古典古代の受容史上の基礎的な事項を網羅している。

(3) 人文主義とナチズムの関わりについてドイツを中心として行われた研究は、東西対立下の先行研究の影響下にあり、その考察の仕方にはややイデオロギー的な偏差が認められる。そこから、一次資料をも調査の対象とすることでこうした先行研究を批判的に吟味し、より客観的な立場から考察を行うことが俟たれていた。

(4) 筆者は大学院の修士課程在籍時以来、18 世紀中期以降のドイツにおける人文主義に関する研究を行ってきた。具体的には、新人文主義の一創始者として重要でありながら従来、日本でほとんど研究が行われてこなかった F. A. ヴォルフという古典文献学者に注目し、彼の文化・学問・教育史上の意義などを明らかにすることを試みた。さらに 19 世紀ドイツにおける新人文主義の展開と国民形成との関連について研究を行った。この両者の関連はしばしば指摘されてきたものの、その詳しい説明は久しく研究史上の空所であった。博士論文を上梓した『人文主義と国民形成 19 世紀ドイツの古典教養』は、このテーマを取り扱っている。本書は、19 世紀ドイツにおける古典語教育および古典研究の発展と国民形成の密接な関連、その特徴、意義を考察したものである。

(5) 同書の刊行後、引き続きドイツの人文主義を研究対象としつつも、考察の時期を主として現代へ近い時期へとずらした。そして 20 世紀前期に活躍した W. イェーガーによる「第三の人文主義」に関する研究を始めた。その一環として彼の主著『パイディア ギリシアにおける人間形成』（以下『パイディア』と略。パイディアは「教育、教養、文化」などの意）の翻訳を行っている（同書の第 1 分冊は 2018 年 7 月に刊行、第 2・第 3 分冊は入稿中）。同書を精読するに際して、彼の人文主義が、20 世紀ドイツの国民形成運動とも言えるナチズムと、両義的な関わりを持ったこと、ナチズムとの関わりは彼の同時代の人文主義者にとって微妙かつ重要な問題であったことに気付いた。上に述べたような経緯で、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

人文主義者は、「古代は”人間性 humanitas”の古典的な原像」たることを謳っていた。したがって彼らがなぜ人間性の蹂躪に至るナチズムと響き合う余地があったのか、問うことができる。本研究は、人文主義者とナチズムとの関わりを思想的・学問的・社会的な背景、両者の関わりを具体的な諸相、彼らが両者の関わりを第二次世界大戦後どう振り返ったかなどを検討した。さらにドイツ第三帝国において支配的であったギリシア・ローマ古典古代観として、そのスパルタ受容を考察した。こうして人文主義者の学問的・教育的な営為と社会的・政治的なコミット（あるいはコミットの欠如）の関わりを読み解くことを通して、人文主義者というドイツ・ヨーロッパの重要な文化的伝統である古典教養を継承する集団が、ナチズムの全体主義という歴史の経験はどう受け止めたか、その明暗を思想史的な視座から検証することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 人文主義者のナチズムに対する関わりを、抵抗、傍観、協力という三つの類型に大別した。そしてそれぞれのタイプを代表する人文主義者として、抵抗については K. v. フリッツと K. ツィークラー、傍観については W. イェーガー、協力については R. ハルダーを考察の対象とした。第三帝国におけるスパルタ受容については、先行研究を整理しつつ新たな資料や考察の観点の発見に努めた。

(2) その際、彼らに関する二次文献に留まらず、書簡、遺稿など一次文献も考察の対象とした(20世紀ドイツの著名な人文主義者の書簡、遺稿などは、戦争などで失われた場合もあるものの、欧米(主にドイツ)の図書館や資料館におおむね良い状態で保存されている)。重要な記録が、こうした未刊行の書簡、遺稿に含まれている場合があるからである。遺稿の存在状況については、本研究と類似したテーマを先駆けて研究し始めた古代史家のV. ローゼマン氏に助言を仰ぎ、またインターネットサイトのKalliopeなどから情報を得ることができた。一次文献は図書館や資料館という現場での閲覧・複写(申込)しか認めていない場合が多く、またドイツの人文主義者に関する二次文献は日本の大学図書館にごく僅かしか存在しないため、欧米(主にドイツ)の図書館や資料館における現地調査を行った。結果として、バイエルン・アカデミー資料館、バイエルン州立図書館、ベルリン・ブランデンブルク学術アカデミー資料館、ベルリン自由大学資料館、ベルリン・フンボルト大学資料館、ベルリン州立図書館、ドイツ国立図書館(在フランクフルト、ライプツィヒ)、フライブルク大学資料館、グライフスヴァルト大学資料館、ハーヴァード大学資料館、ライプツィヒ大学資料館、マールブルク大学図書館・資料館、ミュンヘン大学資料館、チュービンゲン大学資料館において一次文献、二次文献の閲覧や複写を行うことができた(キール大学資料館、ミュンスター大学資料館、ヴロツラフ[旧ブレスラウ]大学資料館からは、例外的に電子媒体で資料を取り寄せられた)。資料面の制約などから、当初予定していたH. ベルヴェ、J. フォークト、W. シャーデヴァルトは考察の対象から外さざるを得ず、代わりにR. ハルダーを研究対象に加えた。

(3) 資料の読解に際して、手書きの重要な資料で判読が困難な場合はブロック体への文字起こしを、業者に有料で依頼した。そして20世紀前半における古典文献学や古代史の研究、古典語教育を取り巻く状況、学問的・社会的な状況を踏まえた上で、上述の4人の人文主義者それぞれの出自、経歴、研究上のテーマ・関心、彼らによるナチズムへの抵抗・傍観・協力の具体的な諸相、それに至った(学問的な)背景、第二次世界大戦後におけるナチズムへの関わりについての反省などを検討した。第三帝国下のスパルタ受容については、ローゼマン氏などによる先行研究で言及されている資料の原典に当たり、そこから関連した資料の発見、読解に努めた。

(4) 検討の最中で、類似した分野の研究を行っている以下の研究者と情報や意見の交換を行った。R. プロッホ氏(ベルン大学神学部教授)、R. メーリング氏(ハイデルベルク教育大学教授)、B. ネーフ氏(チューリヒ大学歴史学部教授)、S. レーベニヒ氏(ベルン大学歴史学部教授)、E. A. シュミット氏(チュービンゲン大学古典文献学科教授)、ウルリヒ・ジーク氏(マールブルク大学歴史学・文化学部教授)(メーリング氏以外とは、対面による)。

4. 研究成果

(1) ドイツにおいては18世紀末期の新人文主義以来、人間性を師表とした(アテナイを代表とする)古典期の古代ギリシアを規範として仰ぎ、歴史学的・実証的方法によってその認識を目指す古典語教育・古典研究が主として行われた(「ドイツとギリシアの親縁性」が謳われ、ギリシアはドイツの国民形成の模範となった)。それは、キリスト教と啓蒙主義の統合によるものでもあった。ところが歴史学的・実証的方法に基づく古典研究の結果、古代ギリシアの古典性は相対化され、古典語教育・古典研究は様々な方面からの批判に曝された。その結果、人文主義的な古典語教育・古典研究は19世紀末期以来、古典語の授業時間数を中等学校で削減されるなど、周縁化の危機に瀕していた。

(2) 1920年代のドイツにおいて、イエーガーを中心とした「第三の人文主義」という古典復興の精神運動が始まる。この運動は新人文主義の乗り越えを目指し、(古典性の相対化をもたらした)歴史学的・実証的な研究から距離を置き、新たな古典性として「パイディア」に注目し、イエーガーの著『パイディア』がこれを描いた。彼は新人文主義における「美的で個人的な人間の形成」に代わって「政治的な人間の形成」を謳い、同時代のドイツにおいて多くの人文主義者の賛同を得ていた。

(3) イェーガーは1933年ナチ党の政権獲得を前にして、当初ナチズムへ協力の姿勢を示した。しかしナチズムのイデオロギーに協力の試みを批判され、ナチズムへの傍観的な姿勢へと転じてゆく。ここでイエーガーとナチズムの古代ギリシア観に内在していた類似と相違に注目する必要がある。両者は本質主義的思考という似た思想の構えを備え、前古典期の古代ギリシア(特にスパルタ)を共に評価していた。しかしイエーガーは前古典期が古典期へ統合される古代ギリシア観を抱いたのに対して、ナチズムは前古典期の古代ギリシアを絶対視した。1936年イエーガーはアメリカのシカゴ大学へ赴任し、第二次世界大戦後はプラトン主義とキリスト教神学との(「観想的な生」を共通点とした)連続性の証明へ、研究の重点を移した。自らのナチズムとの関わりについて、(批判的に)言及することは少なかった。

(4) ハルダーはイエーガーの弟子であり「第三の人文主義」の影響下にあり、当初キケロやプラトンに関する研究を主に行った。ハルダーはイエーガーが渡米した後ドイツの古典語教育・古典

研究の維持に尽力し、ナチ政権下「インドゲルマン精神史研究所」の中心人物として活動した。同研究所は人種理論の歴史的な基礎付けを目指し、支配人種たるインドゲルマン人の過去の征服を鏡に、第三帝国の侵略の正当化を図った。第二次世界大戦後ハルダーはナチズムとの協力を深く悔いたが、同大戦後の彼の一部の研究にはオリエンタリズムの現れ、過去の人種理論との連続が認められる。

(5) フリッツは、主に歴史学的 - 実証的方法に基づく研究に依拠した。彼は 1934 年ナチ政権がドイツの大学教員ヘイトラーへの忠誠宣誓を義務付けた時、それを「真理の教授が妨げられない限りで」果たそうとし、ロストック大学から罷免された。フリッツによる忠誠宣誓の拒否をめぐる弁明などから、彼が真理の探究を（人種理論など）ナチズムのドグマと対立的に捉えていたことが窺われる。フリッツの古典研究の内容は多岐にわたるが、第二次世界大戦後、彼は啓蒙主義に近い人文主義に依拠し、研究を続けた。

(6) ツィークラーもフリッツと同様、その研究の方向は歴史学的 - 実証的方法に強く影響されていた。彼はヴァイマル共和国期、同共和国の維持に尽力し、ナチ学生やナチスとの対立に陥った。その結果 1933 年ナチスの政権獲得に伴い、グライフスヴァルト大学から罷免された。彼はナチ体制下ユダヤ系の隣人や同僚を助けることに尽力し、それが一部露見し処罰を受けた。ツィークラーが主たる研究対象としたプルタルコスが「人間愛」の重要性を説いており、ツィークラーによる「人間愛」の実践はプルタルコスに影響されたことが考えられる。

(7) 以上の考察から、「第三の人文主義」の圏内に属した人文主義者はナチズムへの傍観（イエーガー）ないしは協力（ハルダー）、「第三の人文主義」の圏外に属した人文主義者（フリッツ、ツィークラー）はナチズムへの抵抗へ傾いた、と言える。後二者は、歴史学的 - 実証的な研究を大成し政治的ナリベリズムを擁護した 19 世紀ドイツの人文主義者 T. モムゼンの系譜を継いだことが考えられる。これと関連して、イエーガーとハルダーは人文主義を（ドイツ・ヨーロッパといった）アイデンティティーの形成と関連付け、フリッツとツィークラーは人文主義を普遍主義的なものとして捉えていた。

(8) その際「人間性 humanitas」の理解が、それぞれの人文主義者のナチズムへの関わりに反映していたと思われる。非人間的なスパルタを理想として仰ぐ第三帝国の下で「人間性」に含意された「人間愛」と「教養」という二つの契機から、イエーガーは後者（「パイディア」）の探求に向かった。ハルダーは当初（「人間愛」を含めた）人間性を擁護したが、その時々体制に依じてこの言葉は使われなくなるか意味を変えた。フリッツの言行には、「人間性」の思想を大成した啓蒙主義者レッシングの影響が認められた。ツィークラーは、自らの研究と行いの両者にわたって「人間愛」としての人間性と深く関わっていた。

(9) 以上で述べたように人文主義者によるナチズムへの態度は様々であったものの、彼らの中で助け合いのネットワークが確認できた。イエーガーとハルダーはナチ体制下に公職を失ったツィークラーとフリッツに、それぞれが主管していた雑誌に（想定されたナチ政権からの圧力にもかかわらず）文章を発表する場を設けている。また後二者は失職後、共に刊行中の『パウリー百科事典』から大量の項目執筆の依頼を受けている（ツィークラーについては、この事典の編纂が第二次世界大戦後、彼のライフワークとなった）。

(10) 第三帝国下のスパルタ受容については、スパルタのあり方が同帝国の人種政策、農業政策、教育政策、占領政策、第二次世界大戦中の戦意高揚への呼びかけへ反映した様相、同帝国におけるスパルタへの一般的な関心の高まりを検討した。さらに同帝国でのスパルタ受容に対するドイツ国内、国外での賛否をも考察した。思想史的には「ギリシアとドイツの親縁性」が 19 世紀以降一貫して保たれつつも、その内容が大きな流れとして「アテナイとドイツの（文化を介した）親縁性」から第三帝国に至って「スパルタとゲルマンの（人種を介した）親縁性」へ変化したことを確認できた。

(11) 新人文主義における人間性の理想は、キリスト教（の霊性）と啓蒙主義（の理性）の総合から成り立った。第二次世界大戦後この二つの要素から、イエーガーは前者、フリッツは後者の系譜を継承した。ナチズムの経験は、この総合の両要素が分解するのを、否定的に媒介したと考えることができる。

< 引用文献 >

[1] Näf, Beat (Hrsg.): Antike und Altertumswissenschaft in der Zeit von Faschismus und Nationalsozialismus : Kolloquium Universität Zürich 14. - 17. Oktober 1998, Mandelbachtal 2001.

[2] Der Neue Pauly. Enzyklopädie der Antike, hrsg. v. Hubert Cancik und Helmut Schneider, Bd. 13 - 15, Supplementbände Bd. 6, Stuttgart 1999 - 2012.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 曾田長人	4. 巻 第46巻第2号
2. 論文標題 人文主義者のナチズムに対する抵抗（2）－コンラート・ツィークラーの場合－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東洋大学経済研究会『経済論集』	6. 最初と最後の頁 193-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 曾田長人	4. 巻 第45巻2号
2. 論文標題 人文主義者のナチズムに対する傍観－ヴェルナー・イェーガーの場合－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋大学経済研究会『経済論集』	6. 最初と最後の頁 69-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 曾田長人	4. 巻 第22号
2. 論文標題 人文主義者のナチズムに対する抵抗－クルト・フォン・フリッツの場合－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所『人間科学総合研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 89-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 曾田長人	4. 巻 44巻第1号
2. 論文標題 ドイツ第三帝国におけるスバルタの受容（二）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『経済論集』（東洋大学経済研究会）	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 曾田長人	4. 巻 44巻第2号
2. 論文標題 人文主義者によるナチズムに対する協調 - リヒャルト・ハルダーの場合 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『経済論集』（東洋大学経済研究会）	6. 最初と最後の頁 165-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 曾田長人	4. 巻 第43巻2号
2. 論文標題 ドイツ第三帝国におけるスパルタの受容（一）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『経済論集』（東洋大学経済研究会）	6. 最初と最後の頁 199-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 曾田長人
2. 発表標題 「20世紀ドイツの人文主義者とナチズム その抵抗・傍観・協力の類型をめぐる考察」
3. 学会等名 第20回フィロロギカ研究集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 曾田長人	4. 発行年 2021年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 277
3. 書名 『スパルタを夢見た第三帝国 20世紀ドイツの人文主義』	

1. 著者名 W.イエーガー（翻訳：曾田長人）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 864
3. 書名 パイディア（上巻）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------